

東大寺桜会縁起を読む

辻 憲 男

〔要旨〕 東大寺図書館蔵本『東大寺要録』卷八所載の「東大寺桜会縁起」の本文翻刻と略注。

〔キーワード〕 東大寺要録、東大寺桜会縁起、良弁

東大寺の建立以前、良弁は金鐘山房に不空羅索観音像を安置し、華嚴教学の研究を始めた。のち金光明寺に改め、次いで東大寺羅索院となった、今の法華堂（三月堂）がそれだという。桜会は天平十八年（七四六）三月十六日、良弁が始修した法華大会のことで、以来毎年諸寺の高僧を招請して法華経講讃が行われた。縁起文は百年後の承和十三年（八四六）に記定された漢文であるが、平安後期には嘉承元年（一一〇六）記の「法華会縁起」のほうが読誦されるようになった。

縁起本文は、

①東大寺図書館蔵『東大寺要録』（文明十七年（一四八五）順円写）卷八雜事章

に載せる。その一部分は、卷四諸院章・諸会章、卷一本願章にも引用している（若干の異同がある）。『東大寺要録』の写本は国書総目録によれば二十数種が知られるが、そのうち仁治二年（一二四二）寛乗書写の醍醐寺本（卷一・二のみ）を除けば、多くは江戸期・明治期の転写本と思われる。江戸末期の刊本として、

②『丹鶴叢書』辛亥帙「東大寺要録」（嘉永四年〔一八五二〕水野忠央輯刻）

の十冊本がある。底本は明らかでないが、東大寺本とは小異がある。近代の活字テキストとしては、

③『續々群書類従』第十一宗教部「東大寺要録」（明治四十年） 底本は東京帝国大学図書館蔵小山田與清校合影

写本。丹鶴本を以て参訂。

④筒井英俊校訂『東大寺要録』（昭和十九年。昭和四十六年再版） 底本は東大寺図書館蔵本。校異を付す。

↓『奈良六大寺大観』十「東大寺二」（昭和四十三年）所収「史料」東大寺要録（抄）

がある。本稿では①を底本として翻刻し（同図書館蔵マイクロフィルムによる）、文節に区切り句読を付した。これにより

②③④の本文および句読を適宜訂したところがある。なお研究文献としては、

⑤安藤更生「『東大寺要録』の醍醐寺本と、その筆者に就いて」（『佛教美術第十二冊、昭和四年三月』）

⑥堀池春峰「金鐘寺私考」、「東大寺要録編纂について」（『南都仏教史の研究 上 東大寺篇』昭和五十五年）

などがある。

（注）国書総目録によれば、内閣文庫、東博、京博、東大、東北大、京大、早大、龍谷大、大阪府立図書館、岩瀬文庫、高野山三寶院、鈴鹿文庫、陽明文庫など。大部分が未調査である。

東大寺櫻會縁起

亦名法花會。根本僧正觀音化身之由。見此縁起。

根本僧正

良弁僧正（持統三689〜宝龜四773）。相模国人

漆部^{ぬりべ}氏、義淵僧正の弟子。金鷲菩薩。宝龜四年僧正に補せ

られた（巻一本願章）。

敬白大衆。

大衆 説教の聴聞に集まった人々。

青陽終月。朱明初節。

莊落山寶殿。講鷺峯妙典。

大所以者。

夫以。鹿野春苑。扇薰風於有截。

鷺山秋峯。覆慈雲於无邊。

百億之身。局融山而分暉。

八万之音。兼委海而布響。

故能示見三界。粵稱天下之尊。

光宅六合。或標城中之主。

是以三藏微言。抱百福而遠流。

一乘真筌。貫万象而長馳。

誠知。非一時之津梁。

青陽・朱明 春と夏。『爾雅』釈天に「春為青陽、夏為朱

明」とある。法華会は三月十六日。原字は「朱明」。筒井刊本等の「未明」は誤り。下文「未ト居處」の「未」とは

字形が異なる。

落山・鷺峯 補陀落山（観音の浄土。天竺南海岸）と鷺峰山（靈

鷺山。釈迦が法華経を説いた山。王舎城の東北）。

妙典 すぐれた教えを説いた経典。

鹿野春苑 鹿野苑。釈迦が悟りを開いて初めて説法した苑。

有截 天下。『毛詩』商頌長発に「相土烈烈、海外有截」

とある。「仁霑有截、徳被无边」（大安寺碑文）。

慈雲 仏の慈愛を雲にたとえる。

百億之身 百億分身。毘盧遮那仏が様々な身を変えて現われること。

融山 未詳。

八万 多数。八万四千。

委海 未詳。

三界 生死流転する迷いの世界。欲界・色界・無色界をいう。

尊 仏のこと。

是亦万劫之軌範者焉。

伏惟。法會大施主。故僧正院下。

遍遊普門。示普門之一形。

恒廻迷津。救迷津之多苦。

戒香薰身閣。而三業無瑕。

惠鏡懸心臺。而六情常明。

惜寸陰而傳法燈。

投尺壁而弘聖化。

護法之功。迥超古今。

守土利生之徳。特秀前後。

忠貞外備巽巽。奉六代之朝。

信敬内融乾々。莊三寶之徳。

光宅六合 六合（天地と四方）を光し宅みます。「皇帝陛下、光

宅天下」（統紀天平八・十一・十二）。

三蔵 仏典の経蔵・律蔵・論蔵。経蔵は説法、律蔵は戒律、論蔵は注釈研究。

一乘真筌 真筌は真実の理法をあらわした文句。法華経。

「真筌秘典、永治東流」（統紀宝龜四・十一・二十七）。

津梁 河を渡す架け橋。人々を悟りに導く手引きとなるもの。「菩提之津梁」（大安寺碑文）。

万劫 一万劫。非常に長い永遠の時間。

伏惟 以下、「善事經年不盡者矣」までを卷四諸院章綱索院の項に「櫻會縁起」云として引用。以下文字の異同を「」内に示す。大施主、「本施主」。故僧正は良弁僧正。綱索堂を建立し、法華会を創始した。

普門 觀世音菩薩がすべての者に開いている救い。

迷津 迷いの此岸。悟りの彼岸の対。

戒香・三業 持戒の人の徳が薰香のごとく他に及ぶ。三業は身口意の三つの働き。無瑕、「无瑕」。

惠鏡・六情 磨鏡のごとき智恵の働き。六情は喜怒哀楽愛憎。惠、統々類従本（慧）。以下、統々類従本の文字の異

猶復。以去天平年始。奉為四恩。

窮目連之三往功。

盡毗首之一制匠。

敬造不空羅索觀音自在菩薩像。

為其像也。

立身文餘。徳圓相滿。疑補陀之真儀。

青蓮眼。頻婆脣。似安養正軀。

其像雖就。未卜居處。後經數年。

京城東畔崇麓。占定此地。

為其地也。

東即重巒籠從。兩耀所弊虧。

西則都邑隱軫。八方所輻湊。

同をへゝ内に示す。

傳法燈 法燈は仏の教えを燈火にたとえる。傳法燈、「轉

法輪」。轉法輪は衆生を悟りに導くこと。法輪は古代イン

ドの武器で、仏法にたとえる。

尺壁 壁は壁の誤り。径一尺の大きな宝玉。『千字文』に

「尺壁非寶。寸陰是競」の句がある。

護法 仏法を護持すること。護法、「護恩護法」。「護恩」

脱か。

守土 撰浄土。浄土を求めること。

利生 利衆生。仏・菩薩が衆生を救うこと。

巽巽 従順なさま。巽は八卦の一。巽巽、「巽々」。

六代之朝 聖武・孝謙・淳仁・称徳・光仁ならば五代。平

城宮の天皇ならば、元明・元正を加えて七代。孝謙・称徳

を一代と見たものか。良弁は光仁朝の宝亀四年（773）

滅。

乾々 怠らずに努力するさま。乾は八卦の一。

天平年・四恩 天平五年（卷四諸院章）。これを疑い、十二

年または十八年とする説が有力。四恩は父母・衆生・国王・

三宝の恩。猶、原文「増」。

此處即淨名方丈。窮子草菴。

往々陳烈。容身而已。

爰道力冥感。朝野歸宗。

芟夷荆棘。剪截蒺藜。

構造大厦殿。安置觀音像。

為其院也。

殿堂星羅。房舍雲重。

楊梅春花。椿栢冬葉。

是神仙遊處。復羅漢住處。

是以。近處之天。紫雲覆於殿上。

遠敷之神。香水涌於堂邊。

皆是觀音之德。施主之福。

目連 目連尊者。摩訶目健連。釈迦の十大弟子の一人。神

通第一と言われた。

毗首 毗首羯磨天（彫刻・工芸・建築を司る神）のような仏師、

名匠。匠、「近」《道イ》。

不空縑索觀音自在菩薩像 縑索堂（法華堂・三月堂）の本尊。

一面三目八臂。慈悲の繩（縑索）によって衆生を救う。良

弁が安置し國中連公麻呂が光背を完成した。制作年代については、天平五年、十二年、十八年前後の三説がある。像

高三六二センチ。觀音自在菩薩像、「觀自在菩薩之像」。

補陀之真儀 補陀は觀音。真儀は真相威儀。木像をいう。

青蓮眼 「目淨修広如青蓮」（維摩經義疏）。眼、「毗」。

頻婆脣 頻婆果のような赤い唇。

安養 安養界。極樂淨土。

其像 天平七年に帰朝した玄昉か、同八年に來朝した菩提僊那や道璿などがもたらした新様式によって、良弁が造立したものかという（奈良六大寺大觀・西川新次稿）。

此地 縑索堂はもとの金鐘寺。のち金光明寺。卷四諸院章には天平五年の創建とするが、實際は天平二十年頃か。崇麓、「崇山麓」。

昔者聞禪師王子。住持此院。

今見太子禪門。居住此房。

以知處。自成劫始。成聖者所居。

法尔道理。為王種住處。

國中勝地。天下上所。有過此哉。

所以依止之人。名聞勝利。超於他人。

来修之人。福德智惠。過於自分。

禪礼念觀。無諸妨難。

誦咒讀經。靈驗易得。

稱歎如是。善事經年不盡者矣。

凡此大伽藍。為寺之状。

大佛如金山。寶殿如妙高。

為其地也　この前後は「為く也」で像・地・院を説く。為、

「正」。

重巒龍從　春日山、さらに東山中をいう。龍從は山の陰し

いさま。

兩耀弊虧　兩耀は兩曜。日月のこと。弊虧は蔽虧へいきの誤り。

蔽い隠す。弊、「弊」。

隱軫　盛んなさま。殷軫。「西阜隱軫。日月於焉蔽虧」

(大安寺碑文)。

浄名方丈　維摩居士の居室(方丈)。清浄・名声をいう。

「維摩大士在于方丈」(万葉集・卷五・七九四日本挽歌序)。即、

「初即」。

烈　《列》。

道力冥感　道力は仏道修行によって身に備わる力。「如来

本来已有大乘道力」(法華経義疏)。冥感はそれが仏・菩薩に

感じ取られること。

朝野歸宗　金鷲菩薩の説話(靈異記・中二十一)。宗、「崇」。

惹蓬　よもぎ。「惹、草也」(名義抄)。「惹」はあるいは

「荒」か。

構造大厦殿安置觀音像　金鐘寺、のち金光明寺。卷四諸院

廣大殊特。溢日滿國。不及心言。

寔舍那大覺。法界道場。

他國法寶衆。觀歎揚佈。過於國分。

自國道俗。仰瞻尊敬。賀自能化。

唯知。他土諸番。非普法之機。

我土群品。可遍照之所地者矣。

寶塔高妙。涌於東西。

縱廣正等。左右無比。

各七層級。俱九重盤。

寶鐸篋篔。交音成韻。

遠見之者。如貫苜莢。

近仰之者。如重寶蓋。

章羅索院に「堂一字。五間一面」「天平五年歲次癸酉創建

立也。良弁僧正安置不空羅索觀音菩薩像。当像後有等身執

金剛神。是僧正本尊也」とある。なお執金剛神像はもと金

鷲優婆塞の山寺にあった（靈異記・中二十一）。統紀神龜五年

十一月条の「山房」もこれをさすという（福山敏男・家永三郎）。

星羅 星のように列り並ぶ。星羅雲布。

楊梅 柳と梅。花、「華」。

羅漢 阿羅漢。高僧。遊處、「遊所」。

近處之天 天は仏法を守護する神。帝釈天、梵天など。

遠敷之神 天平勝宝年間、若狭国の遠敷明神が閼伽井の靈

水を奉獻したという伝説。実忠和尚の行法の時、遠敷明神

が狛漁のために遅参したが、行法を聞いて随喜し、黒白二

鵜が磐石を穿ったという（卷四諸院章二月堂）。福、「福也」。

禪師王子 早良親王（天平勝宝二750?〜延暦四785）。光仁

天皇皇子。等定を師として出家入道、二十一歳で受戒。羅

索院に寄住し、後神護景雲三年（769）大安寺東院に移

住した（卷四諸院章羅索院）。「親王禪師」（卷七雜事章実忠）。天

応元年（781）立太子、延暦四年藤原種継事件により廃

太子。大安寺碑文、正倉院文書にも見える。傍注「崇道天

多寶如来。廣大靈塔。如是之也。

薩埵王子。七寶制底。不違此也。

殿堂彦廊。爛然周匝。

諸院諸堂。左右相對。

形十方淨土。表三寶名号。

房舍宮殿連綿。寶幢幡盖行列。

蓮池花苑界別。名花柔草周敷。

松林行樹翦鬱。不別冬夏。

花菓光色。難知春秋。

寺常行事。鴻鐘六時。舉音修六度因。

梵唄二時。讚佛招二轉果。

恒轉法輪。普益衆生。

皇也。

太子禪門 高岳親王（延曆十八799〜貞觀七865）。平城天

皇皇子。大同四年（809）立太子、翌年藤原藥子の變に

より廢太子。弘仁十三年（822）出家、東大寺に入り、

受戒した。空海に師事した。承和十年（843）頃には東

寺にあったらしい（橋本進吉）。傍注「真如親王也」。處、

〔此處〕。

國中勝地 「信上京之勝地也」（大安寺碑文）。

依止之人 依止師えじし。師主。修行・學業で依りどころとなり、

弟子として教えを受ける師僧。止、《山》。

念觀 觀想。

妨難 妨げ。「此土妨難甚多」（維摩經義疏）。

善事經年不盡者矣 以上を卷四諸院章に引用。是、「此」。

大伽藍 以下、東大寺伽藍の莊嚴なさまを述べる。

金山・妙高 妙高は須弥山。金山は須弥山を圍繞する七金

山。

國 〔面〕。

舍那大覺 舍那は毘盧舍那仏。大覺は悟りを得た仏。

法寶衆 《諸寶衆》。

春轉花嚴八十軸。

秋讀般若六百卷。

夏奉一万蓮花。

冬照十千燈。

諸院諸堂各別行事。具不可陳。

如是廣大殊勝。微妙事業。

我王四隣國作此事耶。

化佛三千界非有此事。

加以。六宗達者。自此伽藍。出散諸方。

遍國滿邑。傳法利生眼界。

七道行者。來集此庭。受裏毗尼珠。

還州居村。守國土續佛命。

普法 華嚴經の教え。華嚴宗でいう円満教（別教一乘）。一

つのものに一切のものを具えてあまねく円融すること。

遍照 光があまねく世界を照らすこと。

寶塔 東塔院は天平勝宝五年三月三日、西塔院は同年閏三

月廿三日建立。西塔院はのち長保二年焼亡（卷四諸院章）。

七層級 東塔院は「七重宝塔一基。高廿三丈八寸」、西塔

院は「高廿三丈六尺七寸」（卷四諸院章）。

九重盤 九輪と露盤。

筚篥くわく 二十三絃の樂器。豎琴の類。

苜蓿 苜はかさ草、釣鐘草。莢はおぎ。

寶蓋 天蓋。

多寶如来廣大靈塔 釈尊が法華經を説いた時、空中に七宝

塔が現われ、その塔中の多宝仏が説法を讚嘆したことをい

う（法華經・見宝塔品）。

薩埵王子 釈尊の前生。金光明經捨身品などに見える捨身

飼虎の話。

制底 仏堂のこと。制多ともいう。せいち。

步廊 步廊。大仏殿と南中門・北中門をつなぐ（統紀天平勝

宝八・六・二二）。

是故額標護國寺。口稱東大寺。

大矣哉。聖王大計。

貴矣哉。大施主廣設。

千年万物。惟凡庶類敢思量哉。

僧正大綱。敬作是念。

天生万物。一人為尊。

佛說五乘。一乘為本。

故奉為一人。講一乘經。

莊嚴照臨之鴻德。

報答覆備之厚恩。

以去天平十八年丙戌三月。

奉為桂畏大雄大聖天皇。

爛然周匝 爛然ハ鮮やかに美しいさま。周匝はめぐりまわる。

諸院諸堂左右相對 卷四諸院章總説に「諸院諸坊。連綿相對」とある。

十方淨土 十方に存在する諸仏の淨土。十方は東西南北、

東南・西南・西北・東北、上下。

烈 《列》。

行樹翁鬱不別冬夏 行樹は列樹。並木。行、《竹》。翁鬱

は草木の盛んに茂るさま。卷四諸院章總説に「林樹翁鬱。

不別冬夏」とある。

花菓光色難知春秋 卷四諸院章總説に「華葉光鮮。難知春

秋」とある。

六時 晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜。

六度 六波羅蜜。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の

六種の修行。

梵唄二時 声明を朝夕に唱詠すること。

二轉果 二轉妙果。煩惱障・所知障を転じて悟りを得るこ

と。卷四諸院章總説に「鴻鐘六時。響永息六道苦。梵唄四

季。唱速招四德果」とある。

孝謙皇帝。仁聖太后。

莊嚴堂閣。羅列幡盖。

敷設法筵。囑請名僧。

開方便門。示真實相。

自起此法會去天平十八年以來。

迄此承和十三年。

所經之年。合一百一歲也。

雖年代古過。而法會常新。

敬惟。

僧正院下。佛法棟梁。釋門樞樞。

幼離九屬親愛。練行禪林。

長交六和尊衆。研尋惠業。

花嚴八十軸 唐実叉難陀訳の華嚴經八十卷。三月十四日の

華嚴会は天平十二・十・八、良弁が審祥に請うて講じたのが始まり（卷一本願章）。「色衆百八十人」（卷四諸会章）。この

始修は広嗣の乱と関係があるか（浅井和春『日本の美術』382号）。

般若六百卷 大般若經六百卷。般若会は九月十五日（延喜式雅楽寮）。大仏殿で行われる（卷四諸会章）。

蓮花 七月十五日の盂蘭盆講。絹索院で行われる（卷四諸会章）。

十千燈 十二月十四日の万燈会。大仏殿で行われる（卷四諸会章）。続紀天平十六・十二・八に金鐘寺と朱雀路に万燈を灯した。燈、《燈光》。

諸院諸堂各別行事具不可陳 卷四諸会章総説に「春開花嚴大会。各転八十軸之真言。秋展般若法筵。悉読六百卷之妙文。夏捧一万蓮花。持供千葉台之舍那。冬挑十千燈明。用献大遍照之母馱。如是殊勝廣大事業。……諸院諸堂各別行事。具不可陳」とある。

化佛 衆生を救うためにさまざまに姿を変えて現れた仏。

化、《他》。

桂聲秀當時。特任伽藍別當。

奇徳讓前後。專為寺家統領。

側聞操行作業。内修六度四攝。

希願妙覺無暇。外随四時八節。

住持伽藍忘勞。

供衆僧之礼。全如孝二親。

給淨人之宸。齊如一子心。

無愛憎也。事有親疎哉。

所以六宗三學之士。滿寺餘僧房。

五穀八珎。溢蔵殘莊家。

見聞道俗。俱陳随喜。

往還老少。同讚大能。

六宗 南都六宗。

七道 六道に極樂浄土を加えたものかという。庭の原文は異体字。

毗尼珠 戒律。

護國寺 金光明四天王護國之寺。金光明最勝王經・四天王

護國品による名(統紀天平十三・三・二四、国分寺建立詔)。西大

門の勅額が現存する。

聖王 聖武天皇。

僧正大綱 以下、「而法會常新」までを卷四諸會章「三月

十六日法華會」の項に「法花會縁起云」として引用。以下

文字の異同を(一)内に示す。

五乘 五つの教え。小乗・声聞乘・縁覚乘・菩薩乘・一乘

をいう。

一乘經 一乘真實の教え。法華經。「深信積功、写一乘經」

(靈異記・下七)。

覆備之厚恩 備、《載イ》。覆載は天地。万物を覆ってい

る天と、万物を載せている地。その恩徳をいう。

天平十八年丙戌三月 以下、卷一本願章、同年三月十六日

に「良弁僧正。於繙索院。奉為大雄大聖天皇。孝謙皇帝。

舉國伶年。此寺豐繞。

諸家借求。此寺許散。

以非時緩忽。唯人德耳。

聞此勝能臣。憐生喜望恃其人。

合寺大衆。尊敬守自珎。

加以。所造匠廊煥爛。如知足天宮。

東西連分。遮冬夏寒熱。

進退之人。免雨濕之患。

所張大鼓美麗。如自鳴天鼓。

左右分行。振大妙音聲。

見聞之人。得快樂之利。

彼此俱勝能舉當時。嘉聲流後代。

仁聖皇后。奏聞公家。諸寺聽衆相共集会。始行法花会」とある。また統紀三月十五日の勅に、仁王般若經の講説のこととをいう。同十月六日、天皇・太上天皇・皇后が金鍾寺に行幸して盧舎那仏を燃灯供養した。后、原文「佰」。桂畏、〔掛畏〕。

囑請 膝を屈して招請する。「囑、カカマル、ウヤマフ」
〔名義抄〕。「屈請」。「屈請衆僧」〔靈異記・上二十三〕。

方便門 真実の教えに導くための仮の教え。

法會去 原文「會法其」。〔法會其〕。

承和十三年（846） 仁明天皇。

敬惟 以下「以非時緩忽。唯人德耳」までを、卷一本願章の根本僧正良弁の項に「法花會縁起云」として引用。以下文字の異同を「」内に示す。

棟梁・楯樞 棟梁は仏教団の代表的な僧。「弘演仏教、並為三宝之棟梁」〔書紀推古三・五・十〕。楯は束ねる、樞は中心。

九属 九族。一般に、高祖・曾祖・祖父・父・己・子・孫・

曾孫・玄孫。卷一本願章「耆老相伝云」に、嬰兒の時に坂東にて驚に取られ、山城多賀の辺に落とされ、その郷人に養育されたとある。

万古百今。誰能如是。

佛化之興。令特伽藍之榮。

同昔准事量人。

定知。伽藍大施主。桂畏登霞尊靈。

為濟御願。替玉質應現。

又。世間大導師。滅度積尊。

為持遺法。随生類化現之也。

又聞。綱維尊徳。

心性清氷玉。行業香桂蘭。

為衆僧父母。知時寒熱。

為淨人君主。弁彼苦樂。

教問之礼式。施前後。

六和 六和敬。六法。修行者が身・口・意・戒・見・利の

六つにおいて和合し敬いあう方法。礼拝、讃嘆、信心、戒律、見解、利を同じくすること。

特任伽藍別當 天平勝宝三年五月一日（卷一本願章）。前月

に少僧都（統紀）。翌年四月の大仏開眼に中心的役割を果した。桂、〔徳〕。

奇 〔欲〕。

四攝 四摂法。衆生を仏道に導く四つの方法。布施・愛語・

利行・同事。

淨人 寺人。寺奴婢、寺家人。

宸 〔晨〕。

六宗三學 南都六宗。三学は戒学・定学・慧学の三つの仏

道修行。

八珎 〔八珎之貯〕。

莊家 農家。

能 筒井刊本「徳カ」。

伶年 伶は「飢」などの誤りか。〔鈴、傍書凶年〕（給

イ）。

豊饒 豊饒の誤り。饒、〔饒〕。

賞罰之軌範。秀於當時。

住持無怠。護法有勇。

名聞俱高。德行實寬。

別當院下大徳。廣感。綱之亦尊。

世上有言。金生麗水。玉出岷岡。

若謂此哉。然也。

法會為事。

櫻花散葉。遺氣猶香。

踏木開萼。感色枝艷。

鸞聲嘯林。覺節咀響。

振佛子。列堂散花。

四弘之幡。隨桂風飄。

唯人徳耳 以上を卷一本願章に引用。忽、「急」。

侍 《侍》。

匠廊煥爛 匠廊は回廊か。煥爛は光り輝くさま。卷四諸院

章総説に「殿堂高閣。煥爛圍遶」とある。筒井刊本は「近

廊煥爛」。煥、《慢》。

知足天 兜率天。弥勒菩薩が住むという。

雨濕 雨にぬれる。

自鳴天鼓 帝釈天宮にある、打たなくても自然に鳴るとい

う鼓。「天鼓自然鳴」(法華経・序品)。

快樂 気持ち良く楽しむこと。

伽藍大施主桂畏登霞尊靈 聖武天皇。登霞は登遐(崩御のこ

と)。大安寺碑文にも「登霞」に作る例がある。

應現 仏・菩薩が衆生に応じた姿で現れる。

滅度 悟りの境地。

化現 仏・菩薩が姿を変えて現れる。

綱維 寺主・上座・維那など、一般の僧を監督指導する僧。

「張持法務、令其不傾弛也」(令義解)。

行業 行為。仏道の修行。

浄人 寺人。「諸寺衆僧、率浄人童子等、争来会集」(統紀

五分之香。交春霞薰。

天平十七・五・七。

離欲名僧。服百納衣。連座佛前。

施前後 一字脱か。

智行後進。貴一乘之宗。

金生麗水玉出岷岡 『千字文』の二句。麗水は川の名。今

磊砢堂内。五音之樂。調音二部。

の浙江省。岷岡は崑崙山。

法會為事 以下、桜会の法会について述べる。

踏木 未詳。踏はあるいは躑躅の誤りか。

百味之供。竝色万品。

振佛子 脱文か。佛子は拂子の誤りか。説法の時に拂子を振る。

内外莊嚴。悉窮諸美。

散花 法会の時、花をまいて仏に供養すること。

遠近珍奇。皆須裝飾。

四弘之幡 四弘は四弘誓願。仏・菩薩の起こす四の誓願。

見聞所及。皆盡心力。

五分之香 五分法身を香にたとえる。五分は戒・定・慧。

解脱・解脱知見。

離欲 貪欲を離れること。

所度更復非有悉。是靈山法花一會。

納 《衲》。

智行 智慧と修行。

又補陀仙宮。觀音寶殿。

磊砢 壮大なさま。

此殊勝作事。夫非為誰能。

五音 声明の宮・商・角・徵・羽の五音階。

奉為伽藍大施主。登霞聖靈。

百味 仏前に供える様々な食べ物。「時偉備百味」(靈異記・

中二十五)。

又奉為現在陛下。

然則御願遍照如来。影向照臨。

觀音正聖。應現證誠。

施主上綱。自他利行。

必成七最勝因。定為四德果。

謹白。

承和十三年

裝飾 裝飾。

悉 《恙》 《恙イ》。

補陀仙宮 觀音の浄土、補陀落山。補陀は觀音。仙、筒井

刊本「山」。

現在陛下 承和十三年當時は仁明天皇。嵯峨天皇第二皇子。

聡明多芸、漢学をよくした。在位、天長十年（833）

嘉祥三年（850）。

遍照如来 毘盧舍那如来。大仏。華嚴經の教主。大日如来

のこと。

影向 やうかう。仏・菩薩が姿を現わす。

證誠 しゃうじやう。眞実であることを証明すること。

七最勝 波羅蜜の修行によって得られる性能。安住・依止・

意樂・事業・巧便・廻向・清浄の七つの最勝。

四德 涅槃の四つの徳。常・樂・我・浄。

承和十三年 良弁滅後七十三年。卷五別当章によれば、こ

の年は大徳正進が在任。翌十四年には僧正真雅（空海の実弟）

が就任した。